
異世界に飛ばされました。

探偵川上Q

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界に飛ばされました。

【Nコード】

N5352Z

【作者名】

探偵川上Q

【あらすじ】

魔王を倒すため異世界に送り込まれた二階堂悠木。はたして彼は魔王を倒せるのか？

プロローグ。(前書き)

カメラ更新になると思われますが、よろしく願います。

プロローグ。

……結論から言おう。

俺は異世界に飛ばされるらしい。

何故か？……それは目の前にいる、こいつ等に聞いてくれ。

「うーんとね、一応こいつが僕の世界の中で、君の世界に合いそうな奴だよ」

「へー、こんな奴が？」

人の事をこいつとか、こんな奴とか呼ばわりする自称神に。

「「自称じゃないよ」」

「いいかい、僕は君が住んでいた世界の神」

「んで、僕が別世界の神なの」

「それでだね、何故君がここに呼ばれたかというのだね」

「それは、僕の世界が大変なことになってるんだ」

おい、代わる代わる喋るな。

どっちが喋ってるのか分からなくなるじゃないか。

「僕の世界はね、君の世界で言うと剣と魔法のファンタジーってやつだよ」

「で、僕は別世界の神から助けを求められて、君を呼んだんだ」

「今、僕の世界では魔王って奴が無茶苦茶してるんだ」

「それをどうにかするために、君を送り込むんだ」

「なんで俺が？」

「アンタ等が神様なら、どうにかできるだろ。」

「それがね、僕ら神はね」

「天地創造の時にしか、手出しできないんだ」

「……ちょっと待て。俺をその別世界に送り込むのだって、手出しすることになるんじゃないか？」

「それは違うよ」

「僕らが手出しできないのは、生き物の生死に関する事だけなんだよ」

「つまり、君を送り込んだところで、魔王の死が決定するわけじゃないんだ」

「ということで、君にはいわゆるチートを付けてあげるから、向こうの世界で頑張ってね」

は？ちょっと待て。まだ俺は異世界に行くとは言っていないぞ！

「無駄無駄、君に拒否権は無いよ」

「で、君にあげるチートは、この武器とある能力だよ」

そう言って、俺の前に置かれたのは白銀の太刀だった。

「これはね、ランス、太刀、双剣の三種類に変形させることが出来て、切れ味も落ちない」

「で、能力の方は『エアロック』っていう能力だよ」

「『エアロック』はね、一時的に空気を固めることが出来るんだ」

「つまり、これを使えば、二段ジャンプどころか、空中で色んな動きができるんだ」

「ただし、連続使用は二十回までだから気を付けてね」

「『』というわけで、いつてらっしゃい」「」

おい、待てやこら。

何がいつてらっしゃい、だ。

って、なんで俺は浮遊感に包まれてんだ？

「うわあああああああ！?!?!?!?!?」

俺は超上空から落下していたのだった。

一話 異世界人との初コンタクト。

side フェイ

「この堅物オヤジ!!」

「そりゃこっちのセリフだ、この我が儘娘!!」

私は今、ギルドでヴァルスさんと言い合いをしていた。

「いいじゃない!別に一人で任務受けても!!」

「ダメだつつてんだろ!ギルドでは二人一組が基本だつていつてんだろ!!」

ツーマンセル

毎日こんなやり取りをしているのだが、なかなか折れてくれない。

「もういい!勝手に行くから!」

「あ、おい!止めるフェイ!」

私はヴァルスさんの制止も気にせず、ギルドを飛び出した。

「いいもん、認めてくれないなら、実績を出すまで!」

私は意気揚々と近くの森に向かって走り出した。

side out

side ヴァルス

「あんのバカ……！」

フェイのことだ、どうせ実績上げて認めてもらおうって思ってたんだろ。

「リン、サヤ！」

「なに？」

「どした？」

俺は二人を呼び、事情を話した。

「つまり、フェイを連れ戻せばいいのね？」

「ああ、悪いな。疲れてる所」

「いいよ、別に。フェイは妹みたいなもんだし」

二人とも快諾してくれた。
ホント、いい奴等だぜ。

「じゃ、行ってくるわ」

「マスターは、ゆっくりしててよ」

そう言いながら、二人は出て行った。

side out

俺は落下しながら、どうにか体勢を整えようとしていた。

「んなこと、できるかあああああああ!?!?」

ぐるぐる回りながら、どんどん地上に近づいているのが分かる。

「くっそ……!どうすりゃいいんだあああ!」

その時、手に何かが当たった。

それは、いつの間にか腰につけられていた、あの白銀の太刀だった。俺はある漫画のシーンを思い出した。

もし、この武器の変形したランスが、俺が思っている形をしていれば……。

「そんなことできるかどうか、分からないけど……」

やるしかない。

俺は太刀を手に取り、ランスを思い浮かべた。すると、太刀が一瞬で姿を変えていた。

「うおっ!?!」

その瞬間、ランスを下にした状態で、落下し始めた。

おかげで、体勢の方は安定した。

そのランスの形は、柄の部分で俺の身長と同じぐらいの長さがあり、刀身は柄の二倍以上の長さがあった。

「……これってランスというより、大剣じゃないか?」

そんな疑問をよそに、落下速度は増していた。

俺は大急ぎで鰐に足を乗せた。

そして、そのまま落下速度を上げながら、落ちて行った。

side フェイ

私は森の中をモンスターを倒しながら突き進んでいた。

「なによ、こんな弱い奴等のためにペアを組むなんて」

剣に付いた血を、剣を左右に振って飛ばした。

「さーで、何か実績を示せるものが欲しい所なんだけど……」

そんなことを思っていると、少し開けたところにデカイモンスターが寝ていた。

「……よし、コイツを倒して……」

私は足音を殺して、後ろから近づいて行った。

だが、途中で木の枝を踏んでしまい、モンスターが目を覚ました。

「まずっ!」

そう思った時には遅かった。

モンスターの尻尾が腹に当り、吹き飛ばされて木にぶつかった。

「かはっ!?!」

肺の中の空気が全て吐き出され、その場に倒れこんだ。

「うがあああああ！！」

もうだめだ、と思った。

モンスターは手を振り上げていた。
その時だった。

「うおおおおおおおおお！?!?!?!」

空から声が降ってきた。

s i d e o u t

俺はどんどん加速して落ちて行っている。
息がうまくできない。

「くっ……」

今まで怖くて下が見れなかったが、勇気を出して下を見てみた。
すると、森の中の開けた場所にいる、デカい獣の上に落ちようとしていた。

「うおおおおおおおおおおお！?!?!」

俺は叫び声をあげながら、獣を大剣で切り裂きながら、地面にクレ

ーターを作り上げた。

「ぎゃあああああああ！?!?!?!」

何かが悲鳴を上げながら倒れこんだ。

「ゲホッ、ゲホッ！」

土煙にせき込みながら、大剣を肩に担ぎクレーターから這い出ると、木の近くに倒れこんだ女の子がいた。

「お、おい、大丈夫か？」

「うーん……」

「……気絶してんのか？」

というか、この子の服装って、どう見てもファンタジー丸出しだな……。

剣を握ってていて、皮の鎧を身に着けているし、盾も近くに転がっている。

そんなことを思っていると、突然後ろから声を掛けられた。

「あなた、何してるの？」

「あ？」

振り返ると、東〇に出てくるナイフを投擲するあの人を彷彿とさせる見てくれの女の人と、ゴシック特有の黒を基調とした服装の女の人が立っていた。

「あれは、君が？」

ゴシックさんが指差した先には、先程倒れこんだ獣がいた。

「あ、ああ、そうだけど？」

「ペアは？」

「ペア？なんだそれ？」

「「は？」」

二人が呆れたような顔をした。

「あのね、基本こういう所を行動する際は、ペアで行動するの。どうみても、君ってギルドの人間だし」

「ギルド……？」

ギルドってあれか？

クエストを受け付けるところ、みたいな？

「とりあえず、何処のギルドの所属か教えてくれるかしら？」

東〇のナイフ以下略が、話しかけて来た。

「何処の所属って言われても、答えようがないぞ。どこにも所属してないし」

そりゃそうだ、さっきこの世界に来たばかりだし。

「何処にも……？」

「おかしいなあ……とりあえず、ウチのギルドまで来てもらおうか。そうすれば、問い合わせもできるし」

「そうね」

「というわけで、君。フェイを担いで、ついて来て」

「フエイって誰だよ」

「そこに横たわってる女の子」

「アンタ等のどっちかがすればいいだろ？」

「君、男なんだから頑張りなよ」

「おいおい……」

その後しばらく粘ってみたものの、結局俺が担ぐ事になった。そのため、肩に担いでいた大剣を太刀に戻し、腰にしまった。

「へえー、珍しい武器持ってるね」

「ンなことはどうでもいいから、さっさとしてくれ」

なんでもいいから、とりあえずこの世界についての情報が欲しい。あの神たちの口ぶりだと、元の世界に戻りたかったら魔王を倒せとということだろう。

あいつ等のせいで変な所に飛ばされたけど、こうなってしまっっては仕方がない。

楽しんでやろうじゃないか。

こうして、俺の異世界での冒険が始まるのだった。

二話 戦闘準備

しばらく二人の後について歩くと、森から抜け街が見えて来た。そして、その街の中の酒場みたいなところに着いた。

「さあて、入って」

俺は頷きながら女の子を抱え直し、足を踏み入れた。入った途端、周囲から鋭い視線を向けられた。

「な、なんだ……？」

「はいはい、奥に行つて」

俺はゴシック女に背中を押され、奥に進んだ。

すると、カウンターにいた坊主のオヤジさんが、顔を上げた。そして、俺を一瞥した後、後ろの二人に声を投げかけた。

「リン、サヤ、コイツ誰だ？」

「さあ、私にも分からないわ」

「サヤの言つ通り、私にも分からない。一応連れて来たけどね」
「とりあえず、どこにコイツを下せばいいのか教えてくれ」

俺はそろそろ周囲の視線に耐えることが出来なくなってきたので、声を上げた。

「おお、フェイならそこに座らせておけ」

そうだったな、コイツさつきもフェイって言われてたな。
よし、さつさとフェイを下さないと……。

俺がフェイを下している間に、後ろの二人が事情説明をしていた。

「で、お前さん、どこの所属だ？」

俺がフェイを近くの椅子に座らせたのを確認したオヤジさんが、さつき二人から聞かれたことと同じことを聞いてきた。

「それがさ、ヴァルスさん。この人どこにも所属してないって言うんだけど」

「はあ？ ンなことねえだろ。あの森にいたんだろ？」

「ええ、そうよ」

「……ちよつと待つてろ」

ヴァルスと呼ばれたオヤジさんは、奥に消えていった。

そして、十分後。

再びカウンターに顔を出してきた時、困ったような顔をしていた。

「近隣ギルドに聞いてみたが、あの森に派遣された奴等はいないらしい」

「ということは、どこにも所属してないってのは本当なんだ？」

「そういうことになるわね……」

そこで、三人の目が一齐にこちらに向いた。

「な、なんだよ」

「民間人にしては、得物が上等すぎるしな……」

「それに、ここらで見かけたこともない顔だし……」

「着ている服も、少し変ね……」

俺は自分の着ている服を見た。

長袖の黒ワイシャツに黒ジーンという至って普通の恰好だ。
これが変だというなら、お前らの服の方がおかしいだろ。

「う、ん……」

突然うめき声が聞こえて来た。

どうやらフェイが目を覚ましたようだった。

「おう、フェイ。目え覚めたか？」

「あれ、私、森に……」

「その森で大型モンスターに殺されそうになってたところを、コイツに助けられたそうだぞ？」

「え！？」

フェイはヴァルスさんの大まかな説明を聞いて、驚いたようだ。

「一人で倒したの！？ええつと……」

「二階堂悠木だ。悠木と呼んでくれ」

「ユウキね。私はフェイ・リースよ。それで、あのモンスター、一人で倒したの？」

すごい目を輝かせながら、詰め寄ってきた。

「あ、ああ、まぐれだったけど……」

「まぐれでもすごいよ！ねえ、ユウキは誰と組んでるの？」

俺が返答に困っていると、ヴァルスさんが助け船を出してくれた。

「コイツはどうやらフリーみたいだぜ。どこのギルドにも所属していないし、誰とも組んでない」

「ホント!?」

それを聞いたフェイがさらに俺に詰め寄ってきた。

「ねえ、ユウキ！私と組まない？」

「は？」

「おい、フェイ。何勝手なこと言ってるんだ？コイツは素性も分からない奴なんだぞ？そんな奴をギルドに入れれるか」

「もしかしたら、魔族の手先かもしれないわよ？」

「そりやないでしょ？もしそうだったら、私の使役魔が反応するし」
「……それもそうね」

何やら変な疑いをかけられていたようだ。

「お願い、ヴァルスさん！ユウキの入団を許して！」

「あのなあ……」

ヴァルスさんが渋っていると、ゴシック女がヴァルスさんに話しかけた。

「別にいいんじゃない？だって、大型モンスターを一人で倒せるくらい強いんだし、戦力にはなるでしょ？」

「だがなあ……サヤ、お前はどっ思っ？」

東〇のナイフ以下略にヴァルスさんが話しかけた。

どうやら、東〇のナイフ以下略がサヤ、ゴシック女がリンという名前のようだ。

「そうね……入団テストとして、何かをさせたらどうかしら?」
「入団テストねえ……んー、まあ、そうだな……」

ヴァルスさんは腕を組んで何かを考え出した。

「じゃあ、ユウキといったか。サキとリンのどっちかと、サシで戦え。それで勝てたら入団してもいいぞ」

「いや、俺は入……」
「分かったわ!!」

おい、なんでフェイが答えてんだよ。

「じゃ、ユウキ、どっちと戦う?」
「……はあ」

そんなきらきらした目で見られたら、断れないじゃん。

俺は改めてサキとリンを見た。

どちらも強そうだが……そうだな、リンの方がまだ勝機がありそうだな。

「じゃ……そっち」

俺はリンの方を指差した。

「お、私か。いいよ、早速やろうか」

俺はリンに手招きされ、街外れに連れて行かれた。

俺達に付き添って、フェイ、サキ、ヴァルスさんの三人がついてきた。

「こちら辺でいいかな」

リンは振り返り、10m程間合いを取った。

「さて、始めようか」

俺は頷き、太刀を構えた。

リンは煙草を口にくわえ、火をつけた。
煙草からは真っ黒な煙が出て来た。

「黒煙……？」

俺は黒煙に対して、本能的に恐怖を感じた。

「期待してるよ、ユウキ君。楽しましてね」

リンの言葉が終わると同時に、黒煙が動き出したのだった。

第三話 戦闘！（前書き）

カメ更新すぎる……

第三話 戦闘！

「うわっ！？」

突然、黒煙が鞭のようにしなり、飛んできた。

咄嗟に太刀を手に取り、逆袈裟の軌道で黒煙の大部分を吹き飛ばした。

しかし、霧散した黒煙は再び集まった。

「こりゃあ……」

てつきり黒煙が勝手に動いていたから、コイツが本体だと思ったが……。

俺は、リンの口に啜えられた煙草に視線を向けた。

「それか」

「お、気が付いた？」

「それがこの黒煙の本体、というより、心臓か？」

「その通り。というか、よくわかったね」

「もし黒煙が本体、もしくは黒煙内に核があったら、さっきの一撃で霧散したはずだ」

「へえ、今までに黒煙の初撃に反応できたのは、君で二人目だよ」

「ちなみに一人目は？」

「サヤだよ」

「ああ、なんか納得」

俺は太刀を握り直し、集中するため目を閉じた。

集中しろ。視覚に頼らず、音、風の動き、全てを感じ取れ。

「……いいのかい？目、閉じてて」

「……」

リンの問いに俺は答えず、目を閉じ続けた。

「……ま、いつか。ユウキ君が怪我するだけだし」

リンがそう言うと、風を切り裂く音がした。

あの黒煙が迫って来ていることは、容易に想像できる。あれの速さは相当なものだった。

しかし、この風の流れはさっきと同じだった。

つまり。

黒煙が俺に当る直前、俺は目を開け、本気で地を蹴った。最小限の動きで黒煙を避け、一気にリンに詰め寄った。

「な!？」

「何驚いてんだ？」

リンの啞えている煙草目がけて太刀を振るった。

「くっ！」

リンは上体を逸らし、バク転の要領で俺の顎を狙い蹴りを放ってきた。

それを避け、バックステップで後ろに下がった。

リンも俺から距離を取ったため、最初と同じ間合いになった。

「驚いた、あんな動きができるんだ」

「まあ、親父や九代目に鍛えられたからな」

そう、俺の家系、二階堂家は先祖代々戦闘の専門家なのだ。エキスパート

そこに生まれた俺は、物心ついたところから二階堂家が培ってきた戦闘技術を叩き込まれてきた。

そして、今までの万を超える戦闘技術を全て体に染み込ませ、それらをもとに更なる技術を開発していく。

これが二階堂家の規則だった。

「今ので全力じゃないんでしょ？」

「まあな」

「……じゃ、本気出さなきゃいけないよ」

リンはそう言うのと煙草を手に取り、黒煙で陣を空中に描いた。

「我求めるは影。我に仇成すものを飲みこめ」

途端、描かれた陣から黒い何かが流れ出て来た。

「まさか、それがさっき言ってた使役魔ってやつか？」

「そうだよ、探知能力がズバ抜けてるけど、別に弱い訳じゃないから。さあ、本気出さないと死んじゃうかもよ？」

「リン！やり過ぎじゃないの！？」

それまで黙っていたフェイが叫んでいた。

「ユウキが死んじゃうよ！！」

「俺は死なねえよ」

「え？」

「ようは、俺の本気が見たいんだろ？」

「そうだよ」

リンはにこやかにそう言うと、手にした煙草を躍らせた。

すると、黒い何かが幾つにも分裂し、その一つ一つが狼のような形になった。

その数は、ざっと見ても二十を超えていた。

「さあて、久しぶりにちよつと本気ですか……死にたくないしな」

正眼に構えていた太刀を、片手に持ち構えを解く。

「あれ、構えを解くの？」

「……来いよ」

「!？」

俺は脅しのために、殺気を放った。

「行け！」

リンの号令と共に狼共が一斉に動き出した。

そのくせ、コンビネーションはしっかりできてるようだった。

その証拠に、一体の攻撃を避けた所で次々と、的確に襲いかかってくる。

「ちっ……」

これだけ全部の狼が的確に動けるということは、司令塔の役割を担

う奴がいるはずだ。

「……全部同じに見えるな」

身体的特徴では見分けられない。

「逃げてばかりじゃ、どうにもならないよ?」

リンの言葉を見無視し、俺は避けながら観察を続けた。

「……ん?」

その時だった。

俺はあることに気が付いた。

それはこの狼共の中で、一瞬だけ一匹が動いてないように見えた。避けながらその一匹に注目してみたところ、その一匹は巧みに隠されていたが確かに動いていなかった。

「なるほど、そういうことか……」

しかし、それに近づくには少々骨が折れる。

その時、思い出したのはあいつ等の言葉だった。

『エアロック』

そつだ、確かそれを使えば制限付きとはいえ、ジャンプを繰り返せるとの事だった。

俺は一度、狼の群れから離れた。

「どうしたのユウキ君?ずっと避け続けてるけど?」

「それも終わりさ」

「へえ」

俺は太刀を先程の大剣に変えた。

「……何するつもり？そんな隙だらけの攻撃しかできない大剣で？」
「それはお楽しみだよ」

俺は大剣を全力で地面に叩きつけた。
轟音と共に砂埃が視界を遮った。

俺は大剣を太刀に変え、短い助走と共にジャンプした。
そして、最高点に到達した時、足元に足場があるとイメージした。
それを踏み、さらにジャンプする。
そうイメージすると、足裏に何かがあるのが分かった。

「よつと！」

若干バランスを崩しながらも、再び飛び上がり。
砂埃が晴れたと同時に、俺は落下を始めていた。

「なっ！？」

リンが俺の姿を視認したときには、もう遅かった。

「斬っ！」

俺は狼が反応する前に、動いていなかった狼を兜割りをするように叩き切った。

すると、周囲の狼は次々に消えて行った。

そして着地した時に曲げた脚をバネに、一気にリンに近づき、首元に太刀を添えた。

「ほい終わり」

「……………」

リンはしばらく呆けていたが、ゆっくりと両手を上げた。

「私の負けだね。でも、どうして？」

「何が？」

「どうしてあの影が本体ってわかったの？」

「ああ、それか。あんだだけの数の狼がまったく乱れず攻撃できるのは何故かって考えると、司令塔の役割をする奴がいるはずだって思ってたね。それであいっただけ動いてなかったから、あいっを斬った」

「………… よく分かるね。あんだだけ動いてたのに」

ま、それが出来てなかったら、生きてなかっただろうしな。親父はともかく、九代目が容赦なかったし。

「ユウキ、すごい！！」

そんなことを考えていると、後ろからフェイに抱きつかれた。

「リンのあれに勝てるなんて！！」

「まあ、フェイの言う通り、俺も驚いたな」

続いてヴァルスさんが話しかけて来た。

「リンもやり過ぎよ？ユウキが強かったからいいものの」
「ごめんよ、ついつい」

リンがサヤに窘められていた。

「ヴァルスさん！これでユウキの入団、認めてくれるでしょ？」

「まあ、即興とはいえ入団テストもクリアしたしな……」

「じゃあ！」

「いいだろ。ユウキ、ようこそ」

「よろしくね、ユウキ君」

「よろしく、ユウキ」

「よろしく!!」

こうして。

俺はヴァルスさん率いるギルドに所属することになったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5352z/>

異世界に飛ばされました。

2012年1月8日19時35分発行